

## F-REI 市町村座談会（大熊町）議事要旨

1. 日 時 令和5年12月4日(月) 15:35～16:45
2. 場 所 大熊町役場2階大会議室
3. 議 事
  - (1) 開 会
  - (2) 挨拶
  - (3) F-REI の取組紹介
  - (4) 意見交換  
    <テーマ> F-REI との未来の連携について
  - (5) 閉 会

### 【主な発言内容】

- 当大学では、地域課題解決型の人材育成教育を行っている。学生は大熊町で滞在しながら、シンポジウムの開催、地域行事への参加、町民の方々に対するヒアリング等の機会を通じて地域の課題を洗い出し、その解決の道筋を考えていくことに取り組んでいる。
- 地域課題を学習した学生が将来的にこの地域の担い手になってもらえるような循環型の人材育成を意図している。
- 各地に分散避難している町民との関わりをどう築いていくか、急激な高齢化への対策として避難先の町民の健康増進や健康寿命の延伸をどのように地域の中で取り組んでいくか、考えることも必要。
- 2016年から「浜通り環境放射線研修」を非公式な形で開始し、その後、イノベ機構の“大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業”に採択されるなど、年々研修参加人数が増加し、今年度は参加者が145人にまで増加した。
- 大学内でこの研修への関心が高まり、現在、文理融合型の8つの講義がこの研修に相乗りする形となった。その結果、「大阪大学福島キャンパス構想」が、今年度立ち上がり、大学4つ目のキャンパスを福島県大熊町に設置する計画案をまとめている。
- まずは町内の施設を間借りして、低線量の放射線影響の研究拠点とする環境放射線研修センターを設置する計画である。
- 当大学では、アスタチンを用いたRI（ラジオアイソトープ）創薬に大変力を入れているが、アスタチンは非常に短寿命であり、一か所の研究拠点だけでは厳しいため、F-REIとの連携に期待している。
- 当大学は、川内村、富岡町、双葉町及び大熊町の4町村と連携協定を締結しており、現在6つ

の町村の保健福祉課に拠点を置いて活動している。当大学は震災直後から復興支援を行っており、大熊町では、放射線のリスクコミュニケーションを継続して行っている。

- 主に大学院生を現地に派遣して、一緒に家庭を訪問しているほか、国際セミナーで IAEA（国際原子力機関）や ICRP（国際放射線防護委員会）の専門家の方を福島にお招きして、学生と一緒に復興に関するディスカッションを行っている。
- F-REI の研究分野では、第5分野である原子力災害に関するデータや知見の集積・発信について、東日本大震災・原子力災害伝承館とも連携し、研究の統合を考えながら地域貢献していきたい。
- 商工会としては、町に人がいなければ商売にならないという大きな課題があり、F-REI の研究者に家族と一緒に大熊町に住んでもらえれば、町内の商売も成り立っていくと期待している。F-REI の研究者には、実際に住んで、大熊町の良さを一緒に発信していただきたい。
- 「学び舎ゆめの森」も整備され、教育環境も整ってきたが、町に対しては学生や研究者のためにこれまで以上の住宅整備を望んでいる。
- 大熊町で分析できない放射性物質を東海村に運んで分析しているという現状がとても残念。放射性物質を運ぶにも安全上手間がかかる。町内で JAEA の分析センター第1棟が稼働し、第2棟も建設予定であることから、放射性分析に特化した教育機関を設置していただくとありがたい。
- 農業について、これまでに試験栽培や実証栽培を繰り返しながら栽培作物の安全性を確認してきたが、震災前に大熊町で農業に従事していた町民でさえも営農再開に対する不安は多く聞こえてくる状況。
- 大川原地区が営農再開して今年は2年目で、震災前と比較して作付面積が1年目で20%、2年目には40%と増加しているが、まだ未活用の農地が広範囲にある。
- F-REI ではスマート農業の実証等を考えているとのことだが、大熊町では大規模な農地の集約化に時間を要している状況であり、農業委員会も町と一緒にあって継続的に農地集約に取り組んでいる状況。
- F-REI がもたらす地域へのインパクトと継続的な展開、建設業界に関する新しい技術革新のほか、国際的なビジネス構築、国際教育への取組について期待している。
- F-REI が地元との関係性をしっかり保ちながら、地域の課題を解決することにより、自治体の課題解決のモデル地域になるよう期待している。
- 当社では、町外の大学生、高校生等の若者を対象に、町の課題を解決するための提案を発表し、実際に町内で実行するというアイデアコンテストを行っているほか、農業インターンシップを通じて大熊町について知ってもらう取組を行っている。

また、起業を体験するプログラムを小中学生、町外の高校生も対象に行っている。

- 今後の F-REI との連携については、学生を F-REI の取組に絡めていくことができると考えている。
- 学生、研究者、民間企業、住民の方々との交流形成について、当社はコミュニティづくりやワークショップのデザインを得意としており、異なる分野の人達をつなぐ場づくりに貢献できるので活用していただきたい。
- 現在、県外の大学4年生であるが、大熊町でキウイフルーツ栽培する会社を設立し、先月法人格を取得した。来年、大熊町で 2.5 ヘクタールの土地をお借りして大規模に栽培を進めていく予定。現在は県外で営農再開された大熊町の果樹農家の下で栽培の研修を受けているほか、全国で各地のキウイフルーツ栽培の現場に訪問し指導・助言を受けている。
- 当地域では、特に放射線の風評被害があり、安全性が最も重視されていることから、放射線の数値を含めた栽培情報を私の研究分野であるブロックチェーン等を用いて記録し、風評被害対策となる安心安全を証明したキウイフルーツ栽培情報を次の世代に継承していける仕組みづくりに取り組みたい。
- 栽培技術、農作業負担の省力化の部分で F-REI との連携を期待しており、将来 F-REI にもぜひキウイフルーツを植えたいと考えている。
- 廃炉研究の拠点の一つである「大熊分析・研究センター」は原発事故で発生した放射性廃棄物又は今後取り出す燃料デブリについて幅広い物質を分析、研究を行い、把握する役割を担っている。
- F-REI とは、原子力機構（JAEA）として、放射性物質の環境動態研究の情報について緊密な連携を始めている状況である。
- F-REI 研究に参画できるような人材を地元から輩出していきたい。
- 研究やイノベーションを通して社会、地域に貢献していく研究者が子供達にとってロールモデルとなるよう、F-REI には研究者と子供達が接する機会を設けてもらえるよう期待したい。
- 双葉郡出身の子供達は、地域づくり、地域復興について高い関心があることから、第 5 分野に関するまちづくり研究や社会科学分野、復興、教訓の伝承といった分野の研究に力を入れて取り組んでいただきたい。
- 海外の研究者が家族を伴って移住するためには、子育てや教育の環境が必要であり、本校も海外の研究者の子弟の教育を支援するとともに、グローバルスタンダードの学びを提供できるようにしたい。